

伝来の技法で製鉄

大原小 6年生 作業協力、塊に歓声

一関市大東町大原の内野地区にある砂鉄川たたら製鉄学習館で10日、地元の大原小学校6年生25人が鉄作り体験を行った。

同校6年生と教員、製鉄の実践や調査などに取り組む住民団体・ホッパの会(勝部昌平会長)の会員、県外を含む一般来場者ら合わせて約80人が参加。児童たちが7月に砂鉄川で採取し、不純物を取り除くなどした砂鉄約55キを用いて行った。



燃え盛るたたら炉の中に砂鉄を入れる
大原小6年生

たたら製鉄は火入れした炉に風を送り、砂鉄と炭を交互に加えて行うもので、化学反応で砂鉄中の酸素などが取り除かれて純度が高まるという。

児童たちは会員の説明を受けながら炭を砕いたり、砂鉄の量を測ったりと分担して進め、時間ご

とに一定量の砂鉄と炭をたたら炉の中に投入する工程を繰り返した。燃焼を良くするため、昔ながらの「ふいご」を使って炉に空気を送り込む作業も行った。

赤々と燃え盛る炉の中に砂鉄を入れた藤井紗希さんは「熱くてとても大変だった。暑い夏など季節に関係なく、こういう作業をしていた昔の人はすごいと思った」と感心していた。

午後から粘土製のたたら炉を解体し、鉄の塊が姿を現すと児童たちからは「すごい」「鉄だ」など

と歓声が上がった。水で冷やして灰の部分を取る金属の光沢が見え、出来栄にも笑顔をのぞかせた。

内野地区は良質な砂鉄を産出する砂鉄川の上流部に位置。江戸時代以前から明治時代初期にかけては製鉄も行われてきた。旧内野小では長年児童が鉄作りなどの体験を行い、同校を統合した大原小でもその伝統を継承。現在は6年生が総合的な学習の時間で古里の鉄文化などを学んでいる。



たたら炉から取り出された鉄の塊に見入る児童ら

たたら製鉄の体験は旧内野小時代から通じて今年で17回目。勝部会長(72)は「子供たちにはここが砂鉄の産地で、たたら製鉄も行われていたことを知ってもらい、郷土に誇りを持ってほしい」と願いを語っていた。